保育者養成校における学習意欲を高める音楽の指導法

田　中　慈　子

はじめに

幼児期の感性の伸長に多大な影響力を持つ保育者には、まず保育者自身が音楽表現する楽しさを味わうことができる確かな技能と豊かな感性が求められている。しかし、保育者養成校で学ぶ学生は、保育における音楽の重要性を理解しているため、ピアノ技術を習得するための努力はするものの、その多くが楽しむ余裕がないまま弾くことだけに終わってしまう傾向にある。

そこで、まずは学生自身が、「弾けるようになりたい」と意欲を高められるような教材を使ってグループ発表することで、表現を工夫して音楽を作り上げる楽しさや達成感を味わうことが大切であり、それらの経験を活かすことで、子どもたちと一緒に音楽の楽しさを味わい、表現を受け止められる保育者になっていけるのではないかと考えた。

ここでは、授業「保育実践演習」の報告を通して、学生が学習意欲を高め、音楽表現する楽しさや達成感を味わうことができる指導の在り方について検討したい。

Ⅰ　研究目的

学生が学習意欲を持って主体的に音楽活動に取り組み、感性を高められるような指導法や活動の在り方を検討する。

Ⅱ　研究仮説

1. 学生に耳なじみがあり、個人差に対応できるような楽曲を教材に選ぶことで、学生は意欲持って主体的に活動に取り組み、感性を高められるだろう。
2. ピアノ連弾にてアンサンブルの楽しさを味わうことにより、学習意欲と表現意欲が高まり、音楽を愛好する態度が育成されるだろう。
3. 音楽活動だけでなくコンサート全体の運営も経験することで、イベント全体を自分たちで協力して作り上げたという達成感や充実感を味わうことができるだろう。

Ⅲ　研究内容

1　研究対象授業「保育実践演習」（音楽表現領域）

研究対象授業としたのは「保育実践演習」（2年生後期、選択科目）である。この授業は、幼稚園、保育所において4回にわたる実習を経験し終えた学生が、学びたいテーマ別にこれまでの学びを深め、より高い保育力を身につけることを目標としている。ここでは、音楽表現領域の取り組みについて検討する。

(1) 対象授業：京都光華女子大学短期大学部「保育実践演習」音楽表現領域（2年生後期、選択科目）を選択した学生16名

(2) 調査期間：平成26年9月23日から平成27年1月27日

(3) 授業概要：

表1：保育実践演習（音楽表現領域）

授業回数	授業日	授業内容
1	9月23日	ガイダンス
2	9月30日	ペア決め・曲の割り振り
3	10月7日	Aグループ　個人レッスン
4	10月14日	Bグループ　個人レッスン
5	10月21日	Aグループ　ペアレッスン①
6	11月4日	Bグループ　ペアレッスン①
7	11月11日	Aグループ　ペアレッスン②
8	11月25日	Bグループ　ペアレッスン②
9	12月2日	ピアノ連弾のみのリハーサル
10	12月9日	バレエDVD鑑賞/コンサートの運営について
11	12月9日	全体リハーサル
12	12月16日	最終リハーサル
13	12月20日	コンサート開催
14	1月20日	取り組みの振り返り
15	1月27日	取り組みの報告会

(4) 授業目標：二年間の学びの総括として発表の場を設けることで、学生の意欲・技能・感性を高めるとともに園内イベントの実施方法について実践的に学ぶ。

(5) 使用教材：ピアノ絵本館チャイコフスキー作曲「くるみわり人形」（全音楽譜出版社）より全14曲中10曲抜粋。バイエルからソナチネ程度で演奏できるようピアノ連弾に編曲された絵本楽譜。教材選択の理由は、耳なじみのある楽曲とファンタジー溢れる物語が交互に展開されており、学生が意欲を持って音楽表現しやすいと考えたからである。

2　研究対象コンサート

(1) コンサート概要：「光のコンサート～結びの贈り物2014」（第13回目の授業）

(2) 開催日と場所：平成26年12月20日、京都光華女子大学　音楽室

(3) 内　　容：前半は2年生8組16名によるピアノ絵本館「くるみわり人形」（ピアノ連弾と読み聞かせ）の発表、後半は音楽担当教員13名による講師演奏から成る約90分のコンサート。鑑賞者は1年生と教職員約110名である。

Ⅳ　授業の実践報告と考察

1　第1・2回授業　ガイダンス／ペア決め・曲の割り振り

第1回目の授業では、ガイダンスとして、授業の意義と目標、コンサートの概要を明示した。授業で取り組む教材を紹介し、楽譜を見たり、曲を鑑賞したりすることで、授業内容への興味付けを行った。

第2回目の授業にて、ピアノ連弾のペア決めと曲の割り振りを行った。まず、教員が、受講者16名を他の授業で出会う機会が多い学生が同じグループになるよう配慮しながら、AとB、2グループに分けた。続いて、各曲の難易度をPrimoとSecondoそれぞれ、Aバイエル終了程度、Bブルグミュラー終了程度、Cソナチネ程度、Dソナチネ上級程度となるよう4段階で示した。また、あらかじめコンサートの概要と到達目標、ピアノ連弾の楽しさと難しさを学生に明示した。

そのうえで、グループ長の選出、連弾のペア決め、曲の割り振りは学生たちの自主運営とした。仲の良い友人通しでペアになるのではないかと危惧していたが、一つのグループは互いのピアノレベルを自己申告しあって話し合いにて、もう一つのグループはグループ内でピアノが得意な学生と不得手な学生に分かれてクジにて、表2の通り決まった。

授業を進めるにつれて、この学生による自主運営が大きく意欲向上に影響することになる。必ずしも教員が理想と考えたペアリングや曲の割り振りではなかったが、自分たちでペアと曲を決定したという責任感、この曲を弾けるようになりたいという意志が、全員で協力して一つの作品を仕上げたいという学習意欲につながった。

表2：コンサート演奏曲（グレーの網掛曲除く）と各曲担当者のピアノ技能

	曲名	Primo担当	Primo担当者のピアノ技能	Secondo担当	Secondo担当者のピアノ技能
1	序曲	A1	ソナチネ中級程度	A2	ソナチネ中級程度
2	行進曲	B1	バイエル終了程度	B2	ソナチネ初級程度
	ドロッセルマイヤーおじいさん	B1	バイエル終了程度	B2	ソナチネ初級程度
	人形のパ・ド・ドゥー	B6	ソナチネ初級程度	B8	ソナチネ上級程度
3	お客さまたちのおどり	B3	ブルグミュラー終了程度	B4	ソナタ程度
	静まり返った大広間	A8	ソナチネ中級程度	A7	ソナチネ上級程度
4	お菓子の国への旅だち	A3	ソナチネ中級程度	A4	ソナチネ上級程度
5	チョコレート［スペインのおどり］	A5	ブルグミュラー程度	A6	バイエル終了程度
6	コーヒー［アラビアのおどり］	A4	ソナチネ上級程度	A3	ソナチネ中級程度
7	お茶［中国のおどり］	B5	バイエル終了程度	B6	ソナチネ初級程度
8	トレパーク［ロシアのおどり］	A7	ソナチネ上級程度	A8	ソナチネ中級程度
9	こんぺい糖のおどり	B3	ブルグミュラー終了程度	B4	ソナタ程度
10	花のワルツ	B7	ブルグミュラー程度	B8	ソナチネ上級程度

2　第３～９回授業　ピアノレッスン

(1) レッスン方法

第３回から第８回の授業は主としてピアノレッスンとし、学生 16 人に対し教員１人で指導するため、表３のようなレッスン方法を実施した。また、学生自身が見通しを持って学べるようレッスンカルテを作成した。教員が直接指導できる時間は限られているが、自覚を持って受講する学生は疑問点を明確にして積極的に質問してきた。また、学生間で教え合ったり、YouTube でオーケストラの演奏を聴いたり、物語を読んで楽曲のイメージを持ったりして、自主学習に取り組んだ。なかでも学生間の教え合いは効果的な学習方法で、教わる方は同じ立場からの助言であるため受け入れやすく、教える側はどうすれば相手が弾けるようになるか試行錯誤しながら指導するため、他者を理解する機会となった。また、演奏を録画してペアで振り返りを行い、目的意識を持って練習に臨むことで、自分たちの成長と課題を実感していた。

表３：第３～８回授業におけるピアノレッスン方法

授業回	レッスン形態	レッスン時間
3	A グループ　個人レッスン	１人当たり約 10 分
4	B グループ　個人レッスン	
5	A グループ　ペアレッスン①	１ペア当たり 20 分
6	B グループ　ペアレッスン①	
7	A グループ　ペアレッスン②	１ペア当たり 20 分
8	B グループ　ペアレッスン②	

(2) 第５曲「お客さまたちのおどり」のピアノ連弾レッスン

Primo はブルグミュラー終了程度、Second はソナタ程度のピアノ技能を持つペアのレッスンである。真面目に取り組んで音とリズムは正確に弾けているものの、曲想に相応しい表現ができるまでには至っていない状態でのレッスン受講となった。まず、拍子 3/8、速度 Tempo di Gross-Vater → Allegro vivacissimo → Tempo Ⅰ、曲の構成を確認した。次に、譜例１の①を擬音語で「ティーーア、ティーアタッ、ティーアタッ、タッタッタッタッ」とアーティキュレーションに則って歌ってみる。「ルンルンした気持ち。踊りのステップで」と声かけをすると、驚くほど表現豊かに変化した。次に、ここでのフェルマーターと続く 2/4 拍子 Allegro vivacissimo の意味を一緒に考えてみる。合わせて、強弱にも注目させた。そうすると、f で３拍子の豊かなメロディーを終えた後、沈黙を経て、突然２拍子に変わって、p でスタッカートを伴いながら「ソミドレシドドシド」という音型がものすごい速さで繰り返されることが読み取れた。音域も高いため、より軽やかにシャープさが求められる。「まるで急いで、急いでと言っているみたい」と学生から言葉が出てきた。次第に遠ざかる様子を実際に動いて距離感を感じてみることでイメージが明確になったため、音で表現できるようになった。続く、ff に縦型アクセントがついている和音を、楽譜を見ていない聴衆にもわかるように演奏するにはどうすれば良いか話し合ったところ、「ビックリマークがついているように」表現することとなった。

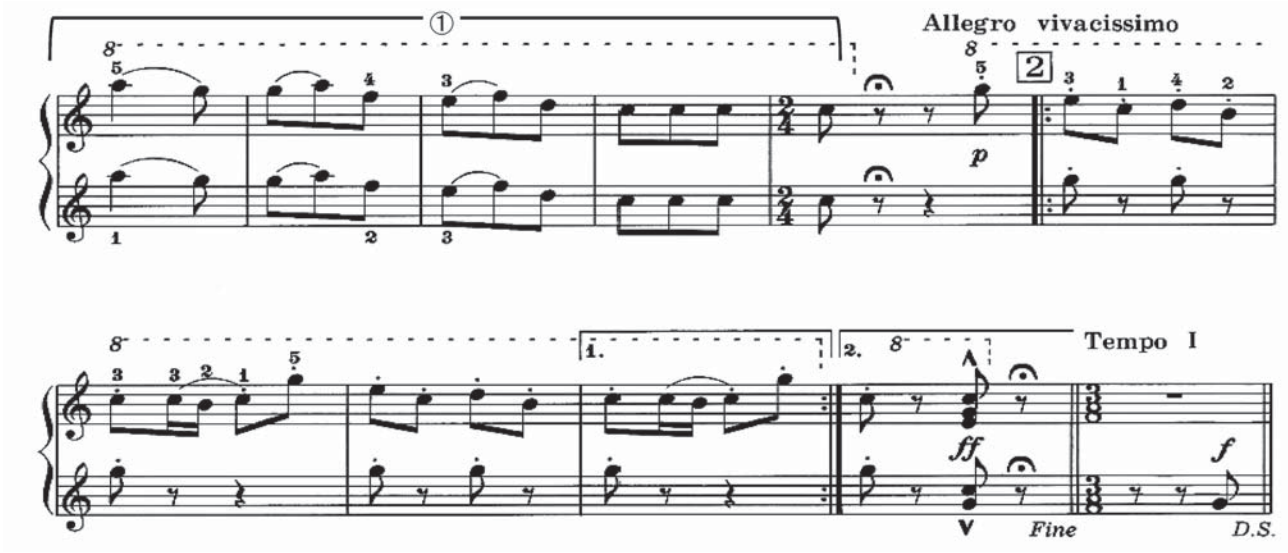
楽譜に書かれていることを教員と一緒に一つ一つ読み解くことで、Primo 担当の学生は「思いをもって表現したら伝わることが分かった」、Second 担当の学生は「納得した上で音楽表現ができるようになった」、と楽譜から読み取って表現する面白さを感じとったようである。

3　第 10 回授業　バレエ DVD 鑑賞／コンサートの運営について

第 10 回の授業は、ボリショイバレエ「くるみ割り人形」マクシーモワ＆ワシーリエフの DVD 鑑賞を行った。学生に３つの観点（観点１→曲想や表現について、観点２→一言でいえばどんな印象の曲か、観点３→踊りの衣装や舞台背景について）を明示してからワークシートを作成させた。結果、学生の曲ごとの主な感想は表４であり、感想を分類すると表５の通りとなった。

自分が演奏している楽曲については、思っていたのとイメージが違った、もっとこうしたいという理想が形になった等、明らかに鑑賞の仕方が他の楽曲と視点が異なる学生が多かった。一方で、他のペアの演奏について、具体的にこうすれば良くなると指摘した学生もおり、指導者としての自分を意識した感想もあった。これは日頃からティーチングアシスタント的な役割で授業に取り組んでいる成果の表れの一つといえる。また、ピアノが得意な学生は、曲の構成、音楽標語やアーティキュレーションに着目しながら聴いている傾向にあり、ピアノがどちらかというと不得手な学生は楽曲全体から受ける強い印象を言語化している傾向にあっ

譜例 1：お菓子の国への旅だち



ピアノ絵本館「くるみわり人形」全音楽譜出版社 35 頁より引用

表 4：バレエ DVD 鑑賞　ワークシート

曲目	感想
序曲	テンポが良くて走り出しそう。切るところはキレ良く切って強弱を活かす。物語の始まりっぽい。優雅だけど音が鋭い。今から何が始まるのかわくわくする。ピアノで弾く時も鍵盤を軽く弾いてみたらよいと思う。
行進曲	ポン！　ポン！と軽い。鳥が飛んでるみたい。ファンファーレ。キレがあった。音に動きがある。低音で大事なところがある。行進曲しているテンポでかっこいいので、自分もそうなりたい。
ドロッセルマイヤーおじいさん	怪しげな始まり。不思議。テンポの変わり方がいろいろで面白い。間の活かし方に特徴。変わり者。つられて踊りだしそう。
人形のパ・ド・ドゥー	みんなが魅了されている。テンポが一定で刻まれていて、曲想と踊りがマッチしていた。人形が動けるようになって嬉しそうに踊っている。「ピロっ」と弾くところが印象的。操られている。人形が踊っているイメージをピアノでも表現する。
お客様たちのおどり	ゆったり→速く→ゆったり。速いところは極端に速くして変化をつける。メリハリが聴いてて楽しめる。豪華。終わったと思ったら、また戻ってきて面白い。厳かで重厚感。場面の変化。2/4 拍子になるところのメリハリがある。
静まり返った大広間	本当に静まりかえっている。メロディーをひきたてて。レガートでとてもきれい。遠くから音が聴こえてくる感じ。BGM のようであまり主張しない。フルートの音が聴こえた。忍び足で。のびやかに。
お菓子の国への旅だち	豪華、ハンサムくん登場、いざなわれている感じ、あ・・・でも幸せそうか、幸せそうだ・・・。今から何かが始まる感じ。盛り上がりがあって強弱がはっきりしていた。王子様とクララが出会って喜んでいる様子。二人を見ていてほっこりする。ラストの旅立っていた様子が印象的。
チョコレート［スペインのおどり］	軽い、夢の国のよう。テンポが良い踊りの曲。くるくる回っている。カスタネットの音が印象的。
コーヒー［アラビアのおどり］	妖しい、不思議、ゆったりと。大人で怪しげな美しさ。コーヒーのブラックみたいな感じ。何かせまってくるように。低音のリズムの刻みがあってのソプラノの歌があると思う。観音様のよう。ポーズが独特。低音のリズムから怪しさが漂っている。
お茶［中国のおどり］	はじく感じ、自然に乗ってしまう。少年少女のような楽しさ。色がでてこない、何色だろう・・・。水がぽっぽっと落ちるイメージ。だんだん速くなるのが特徴。「ヤッパ―」というリズムが印象的。いたずらっ子みたい。思っていたより軽やかでかわいらしい。小人がチョコチョコ走っているイメージ。
トレパーク［ロシアのおどり］	耳に残る。楽しい。速くても正確に。踊りだしたくなるような曲想。縦の線がしっかりしていた。タンバリンが目立っていた。勢いがかっこいい。いそがしさの中に美しさがある。
こんぺい糖のおどり	楽器の音が不思議。小さい粒みたいな歌。かわいく、優しく。スラーを活かす。何か出てきそうな感じ。謎みたいな始まり。オルゴール。人形のようで、氷の上で踊っているみたい。幻想的。金属の音がよく響いていてとてもきれい。高音は人形が踊っている感じ。
花のワルツ	1,2,3 のリズムがずっとある。豪華。本当にお花のよう。夢の世界。花の妖精。フィナーレは最高に華やかに。ハープの音が美しい。鳥肌が立った。メインが盛り上がるように最初は控えめに。

表 5：表 4 の分類

	分類
1	曲の印象をイメージとして捉えている
2	物語を想像している
3	色をイメージしている
4	踊りと曲想を結びつけている
5	オーケストラの楽器の種類に注目している
6	ピアノ連弾で演奏するならばと置き換えている
7	テンポ・拍子・強弱・リズム・曲の構成・アーティキュレーションを意識している
8	特徴的なリズムを擬音語で表現している

た。他には、楽曲に出てくる特徴的なリズムを「ピロッ」（人形のパ・ド・ドゥー）、「ヤッパ―」（譜例 2 ①、中国のおどり）と擬音語で表現した学生もいた。

このワークシートを分析することで、学生一人ひとりがどのような視点で楽曲を捉えようとしているかを理解するきっかけとなり、その後のレッスンにおいて、それぞれの良さを引き出すための参考となった。

続いて、コンサート当日の運営に向けての話合いを行った。今回は履修者全員が演奏するため、当日の司会進行は教員が担当したが、その他は表 6 に従って役割分担を決め、コンサート運営を学生に任せた。

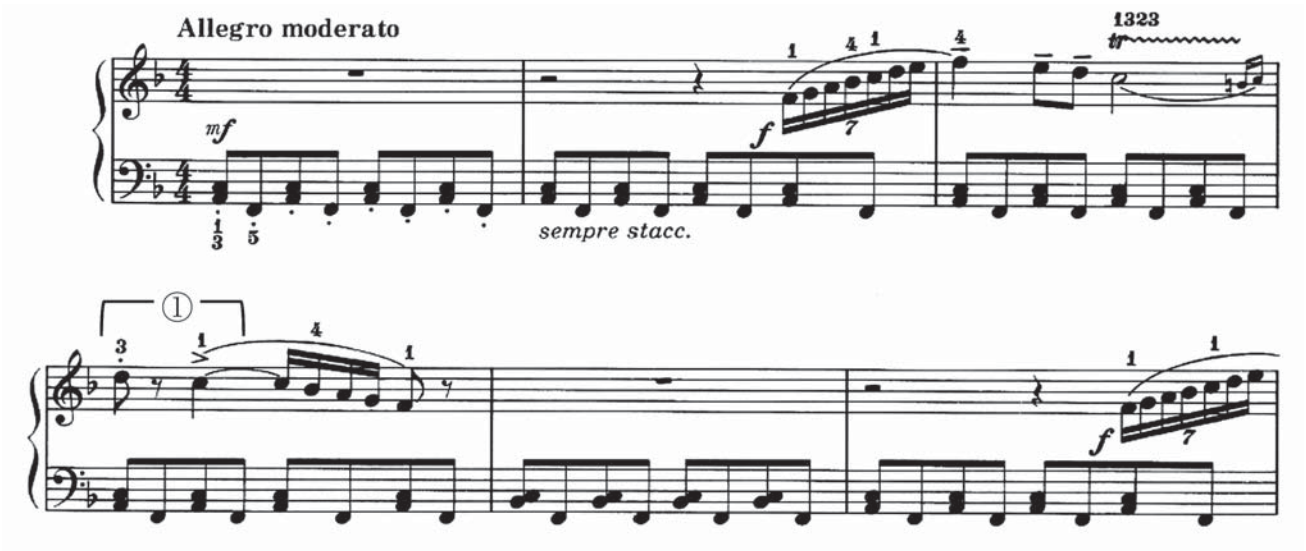
4　第 11 ～ 12 回授業　全体リハーサル

第 11 回の授業は、他教科担当のこども保育学科専任教員の立会いの下、絵本の読み聞かせとピアノ連弾の通しリハーサルを行った。リハーサル後、立ち会った教員から、一つにピアノの技術が思っていたより高かったこと、二つに頑張っていることは伝わってくるが学生のことを知らない観客からみたら楽しむレベルには到達していないこと、三つにグランドピアノは驚くほどペアの音のズレがはっきりわかること、四つにピアノ連弾の演奏だけでなく全体を含めて一つの作品であること、の 4 点について的確なアドバイスがなされた。このアドバイスに学生たちは発奮し、積極的な意見交換を行った結果、以下の 3 点について検討することとなった。

① 上演時間
② 舞台設定（照明、衣装、楽譜、舞台への出入り）
③ 読み聞かせの方法

第 11 回の授業をきっかけに、コンサート当日のリハーサルまで試行錯誤が繰り返された。①については、上演時間が長すぎて観客が飽きるため、表 2 のグレーの網掛けされた 3 曲を割愛し、読み聞かせのストーリーもつながりを失わない範囲に縮めた結果、上演時間が 40 分から 25 分となった。②は音楽室の備品であるホワイトボードと黒い遮光カーテンを用いて衝立とし、舞台への出入りが観客の目障りにならないよう工夫した。他には、楽譜を演奏順にあらかじめ楽譜立てに準備したり、スクリーンがどの観客からも見やすくするためグランドピアノの蓋を半開にしたりの配慮がなされた。また、会場となる音楽室のレイアウトであるが、客席の配置や出演者の待機席、絵本の読み手の立ち位置について、コンサート開演直前までディス

譜例 2：中国のおどり



ピアノ絵本館「くるみわり人形」全音楽譜出版社 66 頁より引用

表 6：コンサート運営　役割分担表

No	役割	仕事の内容	実施日時	人数	担当者			
1	室内飾りつけ	受付のテーブルの飾りつけ	12 月 19 日（金）17:00-	2 人				
2	会場設営	レイアウト図に従ってセッティングとコンサート後、現状復帰	12 月 19 日（金）17:00-	全員				
3	受付	2 テーブルに分かれて受付プログラムとアンケート配布	当日 10:10-10:30	4 人				
4	誘導・案内	席への誘導・案内	当日 10:10-10:30	3 人				
5	照明		当日 11:15-12:00	教員 ＋ 1 人				
6	絵本読み	内、一人はパソコン操作	当日 10:30-11:15	3 人				
7	ステージマネージャー	ピアノ教員演奏時の椅子や譜面立ての設営など	当日 11:15-12:00	2 人				
8	プログラム作り	教員演奏曲目の曲目解説をまとめる	前日まで	教員				
9	司会		当日	教員				
10	ビデオ撮影		当日	教員				

カッションがなされた。次に③であるが、最初は絵本そのものを使って読み聞かせを行っていたが、なるべく後ろの観客にも見えるよう絵本を紙芝居形式にした。読み聞かせは二人の学生が交代で担当し、読むスピード、声の大きさ、間が聞きづらくないか、スクリーンの映像と紙芝居の送るタイミングが揃っているか、に注意を払って練習を重ねた。

一方、ピアノ連弾は、通しリハーサル実施時にそれぞれの演奏に対して良かった点、改善した方が良い点をワークシートに記入し、授業後、全員分を閲覧して今後の練習の参考にするようにした。このワークシートにおいても、次の 3 つの観点を設定した。観点 1 →二人の音楽の調和（音量のバランス、呼吸、タイミング）、観点 2 →曲想にふさわしいか（強弱、テンポ、表現）、観点 3 →楽しんでいるか、である。

試行錯誤をする中で、衝突も生じ、意欲を持てない学生もいたが、コンサートが近づくにつれて「全員でコンサートを必ず成功させる」という一つの目標に向かって、質の高い練習、積極的な意見交換がなされた。

5　第 13 回授業　コンサート開催

コンサートは、学生の学習成果の発表の場であり、同時に教員の演奏を鑑賞することで感性を磨く機会でもある。当日は緊張感あふれる中はじまったが、絵本の読み聞かせとピアノ連弾が聖火リレーのように続いていった。舞台設営など裏方の仕事から演奏、読み聞かせまで、全員で協力して一つの「くるみ割り人形」という大きな作品を作り上げた。また、コンサートで二年生の発表を聴いた一年生にとっては、身近な良い手本となり刺激を受けたようである。

(1)　アンケート調査結果と考察

コンサート後、出演学生に対してアンケート調査を行ったところ、16 名全員から回答を得た。結果は以下のとおりである。

1. コンサートに出演して：
   とても楽しかった 94%、まあまあ楽しかった 0%、ふつう 0%、いまいだった 0%、未回答 6%
2. 選曲について：
   とても楽しかった 81％、まあまあ楽しかった 13%、ふつう 0%、いまいだった 0%、未回答 6%
3. 曲の難易度について：
   ちょうど良かった 75%、難しかった 19%、簡単だった 6%
4. 練習頻度について：

アンケート調査結果において興味深かった項目が練習頻度である。「毎日」と答えた学生の中にはコンサートの二、三週間前から、「授業のときのみ」と答えた学生はコンサート二、三ヶ月前から練習していたと答えている。また、「授業のときのみ」と答えた学生は、授業外に長時間、ペアで自主練習をしている姿を何度も見かけた。よって、この結果だけで練習量を量ることは難しいと考えられる。

写真 1

著作権 京都光華女子大学入試広報部

(2)　アンケートの自由記述欄の考察

アンケートの自由記述欄に、このコンサートを通して学んだことを書かせた中で主な記述は表 7 のとおりである。記述を表 8 のように 6 項目に分類した。紙数の関係上、類似の記述は割愛したが、その中で多かったものは表 7 の記述 1、5、18 である。

この授業を希望して受講した学生ばかりであったが、いざ授業が始まると、受講者のピアノ技能と意識の二極化、「くるみわり人形」という魅力的ではあるが難易度の高い教材、など多くの問題に直面することになった。この問題は、表 7 の記述 11 にある「(ピアノが上手な) 相手に迷惑をかけるので不安」、記述 14 の「(曲が難しくて) 絶対に無理だと思った」、記述 15「日ごろ真面目に取り組まないタイプ」と自称する学生がいるため、記述 16 の「このメンバーで出来るのか不安」に思った学生がいたことにも表れている。それが、ピアノが上手な相手に教わって弾けるようになり、難しくて弾けないと思っていた曲がレッスンを受講することで弾けるようになり、真面目に取り組まなかった学生が継続して努力することで仲間に出来ることを示すことが出来たことが分かる。他にも、記述 10 や 13 にあるように、練習が厳しかったり、仲間との衝突もあったりしたが、困難を乗り越えたからこそ大きな達成感や充実感を感じられたようだ。終演後に涙する学生が多かったことにも表れていたと考えられる。

一方、記述 12 にあるように、途中から意欲が持てなくなった学生もいた。「自分でも訳がわからない」と書いているが、割り振られた曲も一因ではないかと推察する。耳なじみのある楽曲が多い中で、あまり有名でなく、アンサンブルの難易度が高いことから連弾の楽しさも味わいにくい曲が担当であった。そのような状況の中においても、相手と仲間に支えられて練習には参加し、メンバーの一員として責任を果たした。

記述 2「甘く見ていた」や記述 13 の「意識が低かった」は、高いピアノ技能を持つ学生がこの程度で良いと努力を怠っていた事例である。しかし、授業が進む中で、楽譜から作曲家の意図や背景を汲み取って音楽表現することの楽しさを味わい、仲間を引っ張るリーダー的な存在として活躍した。

また、記述 4、7、17、20 のような保育者としての視点による記述も見られた。記述 5 は、思いをもって演奏すると伝わる楽しさを経験し、記述 7 は子どもの育ちの環境を支える保育者としての役割を認識している。記述 17 や 20 は、自分が経験した達成感と充実感を子どもたちが味わえるような保育がしたいと意識を高めたことが分かる。

自由記述全体としては、自分ひとりではなく仲間やペア、教員がいたから厳しいハードルを乗り越えられた、と仲間に対する感謝の言葉が一番多く見られた。これらの記述から、学生は学習意欲を持って主体的に授業に取り組めたと言えよう。

6　第 14・15 回授業　取り組みの振り返り／取り組みの報告会

第 14 回授業では、保育実践演習を履修する学生全体の報告会に向けて準備を行った。まず、個人で学びの振り返りシートを作成した。主な記述は、次のとおりである。

(1)　保育者の音楽の感じ方が子どもたちに大きな影響を与えることがわかった。

(2)　毎日少しでも練習することに意味があり、それが自信につながった。どれだけピアノが苦手でも上手になるとわかった。

(3)　話し合って改善する大切さ、楽しさ。

(4)　思いをもって弾けば皆に伝わることを知ったので、音楽は言葉がなくてもコミュニケーションがとれる心強い味方だと思った。

(5)　音楽はみんなの心を一つにすると学んだ。みんなで作り上げていく中で、友達、ペア、先生、

表７：自由記述抜粋

1	①ピアノ連弾では、一人で弾けても二人の息を合わせることが大変だった。ペアの音をよく聴くことで合うようになり、だんだん楽しくなってきた。
2	①連弾は簡単そうだと思っていたが、やってみると合わせることから苦戦し甘く見ていた。自分の音と相手の音に耳を傾けるなど、音量のバランス調整が大切だと学んだ。
3	①③⑤自分の出来の良し悪しではなく、みんなで作り上げた大きな作品として素晴らしいものになったと思う。本番に向けてやれるだけのことはやったという満足感と、連弾の中での感情のコントロールや相手を聴きバランスを考えるといった演奏上の多くの学び、そして仲間とのかけがいのない時間を共有できたことの感謝の気持ちが残っている。
4	①⑥音楽は「こんな風にしたい」と思って弾くと、みんなに伝わることを学んだので、保育現場でこどもたちと音楽を楽しみたいと思った。リトミックにも応用していきたい。
5	②ペアや仲間がお互い支え合ったり、刺激し合って、意見を言い合えたから完成できたと思う。話し合って良いものにしていくことは大切だと学んだ。
6	②⑤ただその曲を楽しく弾くのではなく「くるみわり人形」の一部として弾くことを考えた。ピアノ演奏だけでなく、絵本の読み聞かせ、会場を整える仕事をすることで沢山の経験ができた。一つのものに向かってみんなで協力することがとても楽しかった。
7	②⑤⑥これまで発表会に参加した経験はあったが、運営を行うのは初めての経験だった。出演するだけでは考えない部分も相談しながら行うことができて大変勉強になった。こういった裏方の仕事が保育現場における先生の仕事なのだと思う。
8	③題材から自由に決めることで積極的になれた。
9	③コンサートが大学の学びの中で一番、継続して頑張れた。本番の日に衝突したこともあったけれど、最高の思い出になった。
10	③④このコンサートのおかげで責任感、達成感を味わえた。ある一回のレッスンがきっかけで、あの日から楽しくなった。厳しくて嫌になった時もあったけれど、今は全て良い思い出でこの授業を取って良かったと心から思う。
11	③④⑤始めはピアノが上手の人とペアになるので迷惑をかけたら嫌だと不安もあった。練習するうちに少しずつ弾けるようになると楽しくなってきた。本番が近づくにつれて自信がなくなって弱さもあったけれど、先生や相手、みんなのおかげで最後までがんばれて、本番も成功して本当にうれしかった。
12	③④⑤個人的には自分でも訳が分からないほど取り組みに身が入らず、みんなに迷惑や心配をかけて申し訳なかった。しかし、その中でいつも支えてくれた仲間の優しさを感じた。これからは、責任を意識して自分自身をコントロールできる力を身に着ける力が必要だと思う。社会に出る前にこのような経験ができて良かった。
13	③⑤最初、コンサートに対して意識が低かったけれど、練習しているうちに「完璧にしたい」という気持ちがいっぱいになり、毎日時間を見つけて練習した。授業の中で何かと注意を受けたけれど、これだけ頑張ろうと思えたのも、本番でこれだけ楽しめたのも先生や仲間がいたから。
14	③⑤最初は絶対に無理だと思ったが、レッスンを受けるうちに先生から「成功できる」という気持ちが伝わってきて、きちんと練習しようと思った。相手と合わせていくうちに楽しくなり、できた時の達成感が大きかった。「もっと」と思うようになり、毎日がピアノづくしだった。コンサートが終わって寂しい。
15	③⑤コンサート後、先生や友達に「感動した」、「やれば出来るんだ」と声をかけてもらって嬉しかった。日ごろ真面目に取り組まないタイプなので、相手と「やれば出来るところを見せよう。」と頑張ってきたので、みんなに伝わって良かった。
16	③⑤最初、このメンバーで最後まで出来るのか正直不安だったが、最後のコンサートでみんなで頑張れて良かったと思った。
17	③⑤⑥意見を出しあったことで仲が深まって良かった。全員で一つのものを作り上げたから達成感と感動が得られたと思う。子どもたちにもこのような経験をさせてあげたい。保育現場では、子ども一人ひとりが主役になれる場が必ずあると思う。発表会はその主役が全員集まって、一つのものを作り上げるので協力し合い支え合わなければならない。人を思いやる気持ち、自分から楽しんで積極的に行動する気持ち、そして何より私たちが感じた達成感や喜びを子どもたちに伝えていきたい。
18	④⑤ピアノ連弾に初めて取り組んで、ペアの人に迷惑かけないよう緊張感を持てたことが良い経験になった。
19	⑤コンサートの出番直前のすれ違う時、声かけして励まし合ったので、みんなが一つになった感じがして温かい気持ちになった。
20	⑤⑥コンサートに向けての取り組みの中で、嬉しかったり楽しかったり、大変だったり、いざこざを経験したことは、この時にしかできないものだから大切にしたいと思う。こういった経験、成功も失敗も、良いことも悪いことも、子どもたちにさせたい。
21	⑥今回は聴衆が大人だったため静かに聴いてもらえたが、子どもが相手だと読み聞かせとピアノ演奏だけでは楽しめなかったかもしれないので、工夫がいると思った。

表 8 : 表 7 の分類

分類
①ピアノの技術・技能に関するもの
②コンサート運営に関するもの
③学習意欲・達成感に関するもの
④責任感に関するもの
⑤ペアの協力・チームの団結力に関するもの
⑥保育現場に関するもの

一人も欠けてはいけない大切なものを得た。

第 15 回の授業にて、代表の学生二人が、パワーポイントを用いて、これまでの取り組みについて、振り返りシートの皆の意見を集約しながら報告した。代表で発表した学生の一人が、保育所に就職後、大学を訪ねて来た際に、「人前で話すことが苦手であったが、報告会の発表やコンサートで読み聞かせを担当した経験を活かして、保育所の行事で自信を持って司会ができた。また、取り組みのディスカッションを経験したので、会議で積極的に意見を述べられている。」と近況報告をしてくれた。このように一人でも多くの学生が、大学での学びを社会で活かせられるような指導法を探求していきたい。

Ⅴ　研究の成果と今後の課題

1　研究の成果

(1)　学生に耳なじみがある曲を教材に設定することで、「この曲を必ず弾けるようになりたい」、「出来るところをみんなに見せて認められたい」という意欲を喚起することができたため、学生が主体的に活動に取り組めた。また、楽譜から作曲家の意図や背景を汲み取って音楽表現しやすい教材であったために、学生が納得して音楽表現することができ、結果、完成度の高い演奏を目指すことができた。

(2)　受講学生のピアノ技能や意識の個人差が大きかったが、必要とされるピアノ技能に幅がある教材を選択することで、大部分の学生に対応できた。どの学生も主役となれる教材であったために、各々チャレンジする困難さと弾けた時の達成感をバランスよく経験しながら、学習意欲や表現力を高めていった。

(3)　音楽活動だけでなく読み聞かせやコンサート全体の運営も経験する中で、仲間との衝突も経験したが、それをみんなで協力して乗り越えてコンサートを成功させたことで、学生が大きな達成感、充実感が味わえる活動ができた。

2　今後の課題

(1)　今回のコンサートの聴衆は本学 1 年生と教職員であったが、今後は地域の子どもたちや保護者を対象として開催することで、より実践に近い学びにしていく必要がある。

(2)　グループ長を二人決定したが、役割がはっきりせず機能しなかった。今回、コンサート当日の運営方法や取り組みの報告会に向けての話し合いの進行を教員が行ったが、今後はグループ長が担えるよう授業カリキュラムを工夫していく必要がある。

(3)　多くの学生は練習やリハーサルを録画し、振り返ることで次の課題を明確に見つけて改善に取り組んだ。今後は、その過程を学習カルテに記入させて、自己の成長を自覚させるとともに、計画性を持って自分で練習に取り組めるよう指導していく必要がある。

おわりに

こども保育学科の教員に着任して、初めて学生主体によるコンサートを開催した。短く少ないレッスン時間でコンサートに出し得るような作品ができるのか、筆者自身、不安なスタートであった。しかし、若さとやる気に満ち溢れた学生のパワーを目の当たりにして、「この学生たちは必ずできる」と信じて指導にあたった。自信とやる気を失いかけた学生もいたが、コンサートの一か月間前から主体的に学ぶ姿が見え始め、ラスト一週間は凄まじい集中力を見せた。全員でコンサートを成功させようとする力が、これほどまでに大きいものであることに驚かされた。

まずは今回の研究で明らかとなった今後の課題を解決して、次年度、より質の高いコンサートが開催できるよう、学生の学習意欲を高める指導法の在り方を探求していきたい。

本稿は全国保育士養成協議会第54回研究発表論文「保育者養成校における音楽科目の指導法に関する検討」を大幅に加筆したものである。

なお、学生には、授業研究の一環として写真、レポートなど資料を使用することについて、了承を得ている。

謝辞

最後になりましたが、コンサートにご出演下さった音楽非常勤の先生方、リハーサルに立ち会ってあたたかくも的確なアドバイスを下さった山﨑玲奈先生に心より感謝します。

引用楽譜

全音楽出版社「ピアノ絵本館　チャイコフスキー作曲　くるみわり人形〔れんだん〕」、p.35、p.66（1984）